

日本学校教育相談学会

THE JAPANESE ASSOCIATION OF SCHOOL COUNSELING AND GUIDANCE

栃木支部会報 2007.03.20

NO.6

- 日本学校教育相談栃木支部理事挨拶 「至福の時」 黒磯南高校教諭 柴 一弥先生
- 日本学校教育相談学会栃木支部月例研修会 毎澤 典子先生
「事例研究会に参加して」 小山市立豊田南小学校 谷田貝 洋子先生
外国人児童生徒指導員 高橋 久美枝先生
- カウンセリング特別講座・合同研修会 演題 「システムアプローチトナラティブセラピー」 吉川 悟 先生
- 「学会研修プログラムによる基礎研修」
- 日本学校教育相談学会栃木支部月例研修会 演題 「家族との連携」 檜林 理一郎先生
- 発達障害特別講座 講座レポート 演題 「発達障害児への対応」 服部 美佳子先生
- 精神医学特別講座 講座レポート 演題 「『うつ』を考える」 手塚 隆夫先生
作新学院高等学校 坂本 恵美子先生
- 平成18年度『カウンセリング特別セミナー』を受講して 作新学院高等学校 中島 正巳先生
- 栃木支部よりのお知らせ

○ 日本学校教育相談学会栃木支部理事挨拶

「至福の時」

柴 一弥先生

黒磯南高校教諭

ここはブラジル、内陸の町。サンパウロから西へ西へひたすら650キロ。近くの大川、「パラナ川」の対岸はポリビアだ。町の名は「グアラサイ」、人口約10000人。日系人が多い町。

私の夏休みはここから始まった。実は、昨年本校に国際交流事業としてブラジルから5人の高校生が短期留学に訪れた。日系3世のブラジル人たちだ。一人の女の子「バレリア」を我が家で引き受けたのである。今回の私のブラジル行きは「バレリア」にもう一度会いたかったからであった。

夏休みに入ってすぐブラジルに飛んだ。10日間の滞在が今の私に許されているぎりぎりのライン。いわゆる物見遊山の観光滞在ではない。彼女の家にどっぷり漬かることにした。

50の齡(よわい)を過ぎて味わった人情、温かくも深い情け。大げさな表現かもしれないが、国境をはるか越えた異国の地で、こんなにも私の感性を揺さぶったものは何なのか。帰国して魔法から解けた今、ますますこの思いは謎を深めるだけだった。

日系人とはいえ、ほとんど日本語がわからない。母国語ポルトガル語と英語が堪能なバレリアを通して、私は片言英語でコミュニケーションをとるしかない。家族の一員に加わったつもりでの私の滞在ぶりはきつとぎこちなかったと思う。一世の祖父母は92歳と86歳、戦前、昭和の10年代、広島と山口から入植した方だった。日本語を一つ一つたどりながらの苦労話と今の幸せを語る姿、その存在感に心を震わせずにはいられなかった。ご両親は二世になるが、母親は小さなこの町の小学校の先生。父親は農園(ファゼンダ)経営。ブラジル人を10名使っている。お二人とも今の生活を築き上げるためにこつこつと道を歩むことにひたすらだったに違いない。バレリアのおねえさんはサンパウロで一人暮らしをしているので彼女は家族の愛を独り占め。動物好きで屈託がない。私はこの家族に囲まれた生活に、日に日に身が清められていくような思いがしてきた。一枚一枚汚れた薄皮が剥がれていくような。

「私が」、「俺が」というような人は誰もいない。ある叔父さんがこう言っていた。「ブラジルは貧富の差があるのは事実だ。でも彼らは悪いことはしない。私たちが手をさしのべている限りはそんなことはしな

い。もし悪いことをしたらみんなで追いかけて捕まえる。この町はそういう町だ。」そう言えばバレリアのお母さんはいくつかの福祉施設に手作りの様々なものを提供していた。お父さんは農作物をやはり無料提供していた。

日本でも最近では耳にしなくなってきた婦人会、老人会、組内組織がこの町の日系人の中では生きている。美空ひばり、三波春夫、あたらしいところで吉幾三がカセットテープで大手を奮っている町だ。

バレリアの部屋には十字架にかけられたキリストが掲げられていた。町には古い教会が静かにたたずんでいた。この町を人種、世代、貧富の差を超えた何か敬虔な空気が支配していると私は感じた。

○「事例研究会に参加して」

小山市立豊田南小学校養護教諭 谷田貝 洋子先生

今回事例研究会に参加してとても勉強になりました。

始めに提供者からの説明、その次に参加者からの質問、それを元に全員でこんな支援はどうだろうと検討、し意見を出し合い、最後に毎澤先生よりアドバイスをいただくという流れでした。質問内容も支援の検討もさすがに教育相談の研修を受けている人が集まっただけあって、いろいろな意見が交換され、すごいと思いました。意見交換の中でも、毎澤先生からのポイントの確認やアドバイスもあり、事例の趣旨を振り返る意味でも確認でき、最後の先生のまとめのアドバイスも事例提供者にはもとより、私にとっても、とても得るものがありました。

帰りに友人と車の中でも「いい研修会だったよね。参加してよかったねー。」と、盛り上がった帰宅となりました。

これからも私もこんな頼りになる研修会には、困ったときには、事例を提供し自分自身の力をつけるとともに、子どもたちのために支援できるように努めたいと思います。よい研修会の機会を与えていただきありがとうございました。



外国人児童生徒指導員

高橋 久美枝先生

昨年に続き2回目の参加です。発表者や他の参加者、的確なコメントをされる毎澤先生に感心しながら、私はどこにポイントを置いたらよいか分からずに、ただただ驚き、皆様の発言に耳を傾けるだけになってしまいます。

私は外国人児童生徒の指導員という立場で、相談員ではありませんが、いつも考えているのは外国籍の子ども達の学校や、クラスでの居場所です。確かな居場所を作るには今どうするべきか。日本語が全く分からないなら、簡単な挨拶とひらがな。日常会話が少しできるなら、語彙や表現パターンを増やそう。日常会話がだいたいできるなら、簡単な作文。会話も作文もある程度できるなら、皆と同じにはできなくても何とかついていける教科を作ろう。といった具合で、その時々の子どもの状態を見ながらの試行錯誤の連続です。

事例発表会での活発なやり取りの中で自分自身感じたものや、得られた知識を仕事で役立てて行きたいと思いつつながら参加しています。

○カウンセリング特別講座・合同研修会

演題 「ナラティブセラピー入門」 吉川 悟先生 龍谷大学文学部教授

平成18年12月9日(土)教育会館5階ホールにて龍谷大学文学部教授吉川悟先生により「ナラティブセラピー入門」についての研修があった。吉川先生は「ナラティブセラピー」を語らせたなら右に出る人はいないと言われる方で栃木県の金子先生が平成17年から熱烈なるアプローチをされていたとのことであった。

そして「まず最初にお断りしておきます。ナラティブセラピーを知ることは相談を困難にします。テクニカルなものでもスタンスでもなんでもありません。帰りたいたいと思われた方はどうぞお帰りなってください。知ることは相談の社会的意味についての矛盾に直面する。くそ真面目に取り組むべきことなので、近寄らないほうがいい。」との言葉で始まった。

先生はいくつか事例を挙げ、

相談者の話す言葉の中に(相手の)意味が含まれている、

相談者は援助者にどんな風に受け取られたいか触発してしゃべる。

援助者が冷静でいるのは気持ち悪いことである。

相談のとき常識だとおもられている知識が邪魔をして相談者が大切にしているものを壊していないか。

まとめとして「わからないことはわかるはずがない。わからないことをわかろうとしている。」が大切であるが、何のためなのか。この質問は何のためにしたものなのか（有益なものなのか）。

など様々な相談者に対してそれぞれ興味関心があるになっていかなければならない大変さが窺え、自分の常識がかえって邪魔になること、自分を保ち続けることの難しさが伝わってきた。

実習として二人一組になり2回行い（自己紹介をする(自分が話したいもの1分間) Ca:3分間しゃべらせる)メインはC1がしゃべるようにする。(しゃべりたいように仕向ける)

2回目は(自己紹介開始後1分後CaはC1に「あなたの趣味は何ですか」と質問する。C1はそれには答える。)その答えに対しCaは「実は私もやりたいと思っていて・・・」と答え、あれこれ相手に教えてもらおう。その際に関心を持って聴く(思わず意図的にやってはダメ)。無理している。興味関心がなくなる)という注意がCaに与えられた。

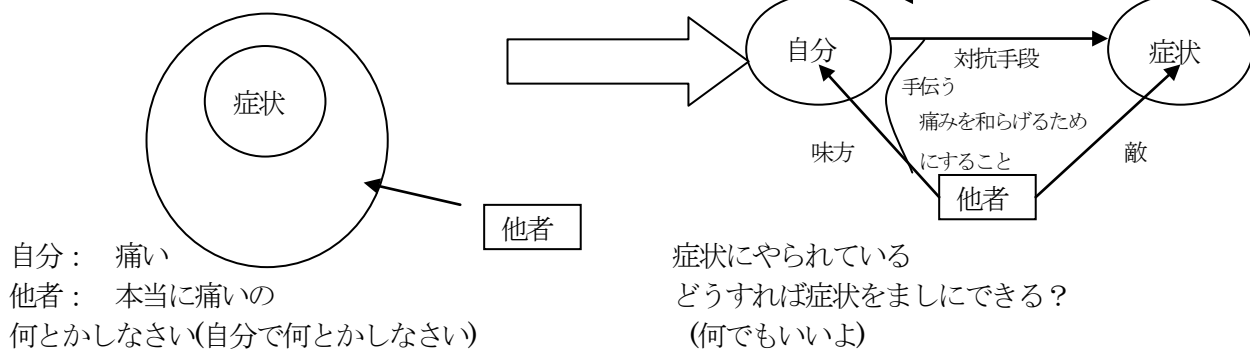
C1のことはわからないから興味関心を持って聴く。即ち、今までじゃない語り方をすると相談者手が今までとは違う語り方をしようかなとなる。C1の方をわかってあげたいという気持ちをどう伝えられるかを体験した。ナラティブセラピーの奥は深く先生の「近寄らないほうがいい。」が随所に窺えたがその中でも、教育相談に携わる我々にC1を大切に思うことの違う道からのアプローチを教えていただいたと思う受講者は多かったのではないのでしょうか。下の左の図を右の図のように援助していきましょう。



自分



痛いやろ!



(齋藤誠一郎 記)

○「学会研修プログラムによる基礎研修」

主 催 NPO栃木県カウンセリング協会
日本学校教育相談学会栃木支部

日 時 平成18年12月23日(土)・24日(日)・26日(火)

場 所 コンセーレ小ホール、とちぎ青少年センター第一研修室

日 程 9:20 10:50 11:00 12:30 13:30 16:30



12月23日(金)	Session 1		Session 2	昼食	Session 3
12月24日(土)	Session 4		Session 5	昼食	Session 6
12月26日(火)	Session 7		Session 8	昼食	Session 9

- Session 1** 「学校教育相談学」
日野 宜千 栃木県カウンセリングセンター代表、臨床心理士
- Session 2** 「保健室のカウンセリングマインド」
須藤 則子 小山第二小学校養護教諭、学校カウンセラー
- Session 3** 「構成的グループエンカウンター」(演習)
築瀬 のり子 塩谷教育事務所指導主事、学校カウンセラー
- Session 4** 「発達障害の理解と対応」
原田 浩司 鹿沼みどりが丘小学校教頭、学校カウンセラー
- Session 5** 「問題行動の理解と指導」
小齋 哲也 那須町教育委員会指導主事、臨床心理士
- Session 6** 「保護者との面接演習」(演習)
丸山 隆 栃木県教育研究所相談部長、臨床心理士
- Session 7** 「不登校の病理と対応」
伊澤 裕 宇都宮市教育センター指導主事、臨床心理士
- Session 8** 「学校カウンセリングの実際問題」
影山 憲一 足利小俣小学校教頭、学校カウンセラー
- Session 9** 「かかわり技法・傾聴技法」
金子 賢 教育心理研究所所長、臨床心理士

今年度もクリスマスをまたいだ12月23日・24日・26日の三日間で、日本学校教育相談学会主催の『学校教育相談基礎講座』が開催されました。参加者は32名でしたが、受講生の皆さんは18時間に及ぶ講座を熱心に取り組み、各自がスキルアップされたと思われます。



○日本学校教育相談学会栃木支部月例研修会

演題 「発達障害児への対応」

服部 美佳子先生 作新大学教授

2007年1月13日(土)教育会館中会議室で『発達障害児への対応』と題した講座が開かれた。講師は、作大の服部先生。栃木リハビリテーションセンター時代から活躍されていたので、受講生は多いだろうと予想してい

たが案の定だった。講師紹介によると服部先生は東京都にお住まいだった頃から発達障害児へ関わったお仕事をされていたとか。現場で体験した数多い事例を最高学府の大学で後進の指導に役立てようと意気盛んだ。

自閉症スペクトラムの図は、ここ数年何度も目にした記憶があったが、服部先生自作のパワーポイントの資料では幼児から学齢期、成人に至る時系列に照らし合わせて示されていた。この辺りが、現場で豊富な事例をお持ちだったことが伺えるところにちがいないと思った。講義は、Ⅰ環境調整、Ⅱ個に応じた対応、Ⅲ成功体験の積み重ねと順序良く進んだ。

最後のまとめの言葉が忘れられない。プロジェクターから映し出された画像には、こう記されていた。「子どもの支援は、子どもに合わせてオーダーメイド」と。

(八島禎宏 記)

○精神医学特別講座

演題 「うつを考える」 手塚 隆夫先生

2月3日、栃木県教育会館5階の大会議室に一番町クリニックの手塚隆夫先生をお招きして『うつを考える』という演題でご講演を頂きました。先生は、この日の1時30分まで病院で診察を行う多忙の中の講演でした。この講演は、受講者のうつに関する興味・関心の高さと教育研究所の研修講座や栃木県カウンセリング協会との協賛も手伝って、大入り満員の盛況ぶりでした。受講者の感想を掲載して、講演会の様子が伝わればと思います。

(藤浪 直紀記)

○「事例研究会に参加して」

作新学院高等学校 坂本 恵美子先生

「うつ」は、最近の多方面で取り上げられ社会的に認知の変化があり、以前ほど特別な病気ではなくなり、学校相談の場においても「うつ」に悩む生徒に会うようになりました。手塚先生は、「うつ」の神症状と身体症状や、近年の研究で脳に器質的な変化が起こるために発症するなどといったうつ病の脳のメカニズムについて説明してくださいました。治療では自殺の防止を念頭におき①「早期の受診」、②「十分な休養」③「薬物療法」を三大原則としてあげ、さらにうつ治療に関する情報提供をしてくださいました。

先生の「患者さんが訴えることより症状を聞きだしたほうが発見できることが多いんですよ。」という言葉から技法を生かすための道具となる心と体の関連性やうつ病の特異性、支援の仕方を学校相談に携わる者として学ぶことができました。



○平成18年度『カウンセリング特別セミナー』を受講して

作新学院高等学校 中島 正巳先生

今年度、上記講座を受講させていただきました。毎回多くのことを学ばせていただき、講師の先生方を始め、栃木県教育研究所の諸先生方に変感謝いたしております。本当にありがとうございました。

今手元に講義ノートがあります。項を繰ると、講師の先生方の真剣で誠実な人柄や、熱い思いがよみがえってきます。行く先を失って立ちすくむ子どもたちに寄り添い導く、強い意志とさまざまな方法の一端が示されています。講義を受けるたびに自らの姿勢を反省し、少しでも自分に力にしたいと願いました。帰る道すがら自然と謙虚な気持ちになっていました。できるだけのことをしよう、少しでも力になろう。でも何ができる……。

まだ、何の力もない自分に気づきました。もっと勉強をしなければならない。もっと自分のスキルを高めなければならない。そして、生徒の苦しみにきちんと向き合うだけの心根を養わなければならない。これまで私が出会い、そして何もしてあげることができなかった子達への申し訳なきと後悔とをしっかりと胸に刻んで、これから出会う子達への精一杯の取り組みと思いを心に誓って、頑張っていきたいと思います。これからもっと教えていただかなければなりません。よろしく願いいたします。1年の感想がこれでは、先生方に申し訳ない、と自分でも思いますが、改めて心からの感謝を申し上げ感想とさせていただきます。ありがとうございました。

○ 栃木支部からお知らせ

①会員連絡先の確認

皆さまへの会報やお知らせの返送を防ぐために、連絡先、住所確認のハガキを同封いたします。

個人情報保護法等の関係もありますが、同封のハガキに必要事項を記入の上、投函していただきますようよろしくお願いいたします。

②日本学校教育相談学会栃木支部総会についてのお知らせ

H19、2、6に行われた栃木支部理事会において来年度の事業計画、支部運営について話し合わせ、総会日程が下記のように決まりましたのでお知らせします。

場 所 栃木県教育会館 5F 小ホール

日 程 平成19年6月2日(土)

内容・講師 詳細は後日ご案内いたします

日本学校教育相談学会栃木支部

〒320-0066 宇都宮市駒生 1-1-6 教育会館内
栃木県教育研究所相談部 日本学校教育相談学会事務局

TEL・FAX 028-647-5682

(発行責任者 丸山 隆 / 広報担当者 藤浪 直紀)